

大学博物館における教育普及活動の研究

展示と展示解説

守重信郎

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study on the Activities of Educational Diffusion at the University Museum

- University Museum Exhibitions and Gallery Talks -

Noburo Morishige

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this paper is to examine university museum's original activities to effectively promote education. In doing this it clarifies the present conditions and problems of Japanese university museums and considers what the proper style of such activities should be. It describes how such museums can best function, talking into account the opinions of both academic researchers, ordinary visitors and the special characteristics of university museums. It is suggested that the introduction of original exhibitions of quality, the use of correct quantity and clear description together with "hands on" and gallery talk activities all contribute to making the museums effective educational motivators in a way that will encourage researchers and visitors alike to expand their fields of interest and to continue to deepen their study.

はじめに

1996(平成8)年1月18日、第14期文部省学術審議会学術資料部会は『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』と題する中間報告を提出した。この報告は、国公立大学での学術標本の収集・保存・活用の充実を図るものであり、学術情報の発信・受信基地としての大学博物館の果たす役割を強調している⁽¹⁾。この提唱を受け、東京大学総合研究博物館や京都大学総合博物館などの国立大学の総合博物館が相次いで開館した。この報告にあるように、近年、大学博物館への関心が増大している。

現在、全国には多数の大学博物館・資料館相当施設が存在するが⁽²⁾、その多くは学内の学生・教員の研究に役立つ目的で設立され、学外開放に対しては消極的な施設が多い。この報告の意図は、こうした大学博物館・資料館の閉鎖的な体質を批判しながら、

「このミュージアムを機能させることは、社会が要請する『開かれた大学』への具体的で有効な対応策である」⁽³⁾と述べられている。すなわち、大学博物館・資料館が一般の市民を対象とした生涯学習の一環として活用されることを提言するものである。

ところで、わが国の教育界は社会の少子高齢化、科学技術の高度化に伴い、急速に生涯学習体系への移行を必要とし、とりわけ高等教育との密接なかわりが求められている⁽⁴⁾。しかし現在の大学博物館は、一般の博物館とは異なり、社会教育機関としての意識が薄い場合が多い。この原因は、先の資料部会が指摘するように、大学博物館の閉鎖性が主なる要因であるだけでなく、その活動が大学博物館によりまちまちであることによる。

現在、大学博物館に関する研究は、研究偏重から引き起こされる閉鎖性などを指摘するものはあるが、大学博物館の特性に考慮しながら、具体的な教育普

及活動を提案するものは見当たらない。大学博物館には高等教育機関の一施設として、一般の博物館とは異なる特性があり、それを生かした独自の教育普及活動が考えられるのではないだろうか。したがって、社会が大学博物館に注目している今、大学博物館の特性を考慮した効果的な教育普及活動の議論が必要と考える。

本研究の目的は、大学博物館の教育普及活動における現状と問題点を明らかにしながら、高等教育機関における生涯学習の機会を保障する制度としての大学博物館独自の有効で効果的な教育普及活動のあり様を探ることにある。

なお、本研究の教育普及活動は生涯学習者を対象とする。これは、学校見学では指導プログラムとの関係、教師との連携といった点で、独自の方法が求められることによる。本研究は、以下の3点を研究課題とする。

- 課題1 大学博物館の機能を考察し、その特性を明確にする。
- 課題2 大学博物館の教育普及活動の現状から、その問題点を明らかにする。
- 課題3 課題1で明らかになった特性を考慮し、大学博物館の独自で有効な教育普及活動のあり方を検討する。

これらの課題を解明するために、大学博物館の研究者、学芸員、見学者などの意見を集約し、先行的な事例に基づいて考察を試みる。大学博物館の機能と特性、現状と問題については、大学の博物館学の論文、研究紀要、書籍等の文献資料を参考にする。また、教育普及活動のあり方を導き出すために文献資料に加え、先行的な施設を調査研究することも試みたい。

大学博物館の機能と特性

(1) 博物館としての機能

大学博物館は、大学に設置された博物館であり、社会教育機関であると同時に、学内の共同利用機関である⁽⁵⁾。したがって、博物館としての機能を有するとともに、高等教育機関としての機能も有する。もともと博物館は、博物館法第2条によれば、「歴史、

芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して、教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関である」と定義されている。したがって、博物館の機能は「資料の収集」「資料の整理保管」「教育普及活動」「調査研究」を挙げることができる。大学博物館も、博物館として一般の博物館と同様に、上記の4つの機能を有する。

(2) 大学博物館独自の機能

博物館法によりその理念が確立されている一般の博物館とは異なり、大学博物館には、法的規定や理念が確立されていない。そのために大学博物館の機能は、理念から演繹することはできない。したがって、本編では現在の大学博物館が行っている活動から、その機能を導き出す。今後、大学博物館の整備のために大切なことは、法的規定を含めた、大学博物館の理念の確立である。

高橋は、大学博物館を設置目的によって、研究の過程で蓄積した学術資料・標本の収蔵・保管の必要性から、特に芸術教育における実物教育の場として大学創立記念事業に際して学外に対する研究成果の公開施設・機関としての設置を挙げている⁽⁶⁾。高橋は、これらの分類が複合的に関与すると述べ、目的や各機能の性質に着目した次の8分類を紹介している。

A	大学での教育研究の過程で自ら作成収集蓄積した試作品・標本・資料等の収蔵研究展示機関
B	大学での教育に利用するために入手した標本・参考資料類の収蔵研究展示機関
C	研究教育上生きた教材・標本類を育成保管する機関
D	校史関係資料を収蔵展示する施設
E	創設者や著名な教師を顕彰記念する施設
F	大学での教育内容等は直結しない大学や創設者のコレクションを収蔵展示する施設
G	主に一般が利用する社会教育・慰楽施設
H	学芸員養成のための実習教育用施設

この中で、Aの試作品・標本・資料は学術資料を指すと考えられる。また、Cの生きた教材・標本類は動植物類を対象にすると思われるが、Aの学術資料の範疇に含めることが可能と考えられる。このような学術資料の学内外への活用が大学博物館の特性である。この点について西野は、大学博物館を「学問の体系に沿って収集された学術標本コレクションを恒久的に保存・管理する保管施設であると同時に、学内の教育研究を支援する基盤施設であり、且つ又先端的な知と情報を創出・発信する施設である」と述べている⁽⁷⁾。また、Bは学内研究・利用のための機能であり、D・Eは大学宣伝機関としての性格が高い。Hの学芸員実習の場としての機能は、現在は一般博物館も関与しているが、本来は大学博物館が行わねばならないものである⁽⁸⁾。これらの点を考慮すると、大学博物館独自の機能は、学術標本の収集機能、学術研究機能、研究成果の教育普及機能、学芸員養成機能、大学宣伝機能の5点にあると思われる。

(3) 今なぜ大学博物館なのか

1996(平成8)年のユニバーシティ・ミュージアム構想に見られるように、今、大学博物館への世間の関心が増大している。では、なぜ今大学博物館が注目されるのか、そこには生涯学習の高度化・体系化と、少子化に伴う大学の差別化という二つの要因が考えられる。

現在わが国の生涯学習は、社会の少子高齢化、科学技術の高度化に伴い、急速にその高度化・体系化が叫ばれており、その内容は、以前の教養的なものから、より学問的・実用的なものへと移っている。その結果、生涯学習の高度化・体系化の波は、必然的に高等教育機関により密接なかかわりを求めている。しかし、わが国ではリカレント教育を例にとっても、以前からその重要性が叫ばれながら、社会制度の整備の遅れも起因し、働き盛りのサラリーマンが仕事を休み学校に復帰することは困難である。また、高等教育機関と自治体との共同で、社会人大学や市民大学といった比較的開催期間の長い講座が数多く行われているが、やはり時間的制約に対する不満が多い。このように、わが国の生涯学習は高等教

育との連携が叫ばれながら、特に時間的制約から一部の層に集中してその恩恵が与えられているという問題がある。

そのような中で高等教育の研究成果を保存し、一般に公開する大学博物館は、公開時間内であれば自由に見学が可能で、比較的時間の制約を受けない利点がある。「ユニバーシティ・ミュージアム構想」は、このような博物館の特性に着眼し、学術資料の地域への発信基地としての大学博物館の重要性を提唱するものである。このように大学博物館は、生涯学習と高等教育の接点として、高等教育の専門的な情報を社会に提供する場として、まさに今、その積極的な活動が求められているのである。

また、最近少子化に伴う受験生確保のために、大学が積極的に教育内容を社会に宣伝し、知名度の向上を図る必要がある。その点、大学博物館は大学にとってもその施設の充実ぶりを宣伝できる効用がある⁽⁹⁾。近年、大学博物館の開設が多いのは、決して外部からの要請のみによるのではなく、大学側も生き残りをかけて他大学との差異を計るための戦略の一環として差別化を図っているのも一因である。このように大学博物館は、生涯学習という社会からの要望と、大学のイメージ向上という内部の要因の両方から、今その活動が問われている機関であるといえることができる。

大学博物館の特性

以上、大学博物館の機能と社会的意義を考察した。これまでの考察により導き出される大学博物館の特性は、学術標本の収集・保管・活用、特定分野を深く掘り下げた専門性、母体となる高等教育機関との連携の3点にあると思われる。

(1) 学術標本の収集・保管・活用

学術標本は、学術的な裏づけを伴って体系的に収集された資料であり、大学の学制に沿った学問体系が反映されたものである。これは大学の研究成果を検証する資料であり、高等教育に資する資源である。したがって学術標本は、学問を構築する基礎となる資料といえることができる。このような学術標本の収

集・保管・活用が大学博物館の特性である。

(2) 特定分野を深く掘り下げた専門性

現在大学博物館の多くが専門博物館であり、この専門性は、国立大学の総合博物館においても例外ではない。このような総合博物館は、大学の様々な学部の研究により蓄積された資料を分類し、展示・公開する。しかし、現在の国立大学の総合博物館を見ても、北海道大学総合博物館(自然史系)、東京大学総合研究博物館(自然史・考古学系)、京都大学総合博物館(文化史・自然史系)のように、あくまでも自然史系、考古学系などの専門性を有している館がほとんどである。この専門性は、私立大学の博物館・資料館においてはさらに著しく、武蔵野音楽大学楽器博物館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館のように、特定の分野に絞った収集・展示を行う館が大多数を占める。これは、最高学府としての高等教育の成果を蓄積する施設として当然のことと言える。このような特定の分野を深く掘り下げた内容に大学博物館の特性を見ることができる。

(3) 母体となる高等教育機関との連携

大学博物館は高等教育機関の一施設として、背後に母体となる大学の知的情報、施設、人材を有する特性がある。学術標本の裏づけとなるリファレンスや文献、研究論文などの資料は大学研究室に整理保管され、大学図書館には膨大な関連資料が所蔵されている。また、学内の他分野の研究者との情報交換も迅速かつ緊密に行うことができる。このような母体となる高等教育機関と連鎖した活動が大学博物館の特性である。

大学博物館の教育普及活動の現状と問題点

(株)展示学研究所の1999年10月から2000年3月までの調査によれば、当時のわが国には、非公開のものを含め、大学付属の博物館・資料館相当施設は大小問わず約250館を数えることができると報告されている。これらの大学博物館等施設の活動については、以前からその閉鎖性、研究分野への偏重性、

貧弱な展示状態が指摘されてきた⁽¹⁰⁾。また、「学術情報の墓場」とまで指摘され⁽¹¹⁾、新たな「ユニバーシティ・ミュージアム構想」の理論的根拠の一つになっている。このような消極性は、教育普及活動にも現れており、開館日数が少ないだけでなく、展示解説文の不足、企画展示の少なさなどの問題点も指摘されている。

(1) 開館日数

(株)展示学研究所の調査⁽¹²⁾によれば、大学博物館の開館日数は、年間214日が平均で、200日以上300日未満が115館中42館で最も多く、回答館の36%にあたる。また、100日以上、200日未満の館が17%、100日未満が10%と、200日未満全体は調査館の27%である。一方、日本博物館協会の平成4年の調査⁽¹³⁾によれば、全国の登録博物館・相当施設1257館の98%が年間150日以上開館し、86%にあたる1086館が250日以上、48%にあたる610館が年間300日以上開館している。開館日数年間200日未満の館は、大学博物館では全体の27%を占めるに対して、一般博物館は全体の0.5%に過ぎない。この数字からも、大学博物館の開館日数の少なさが裏づけられる。

これに対し、大学博物館の開館日数の数字は、あくまで公表されている開館日の数であり、多くの大学博物館が、職員の勤務時間内であれば、閉館日であっても展示室を開け、来館者を受け入れているという指摘も出来る。施設により異なるが、たしかに職員の対応の可能な範囲で随時見学者を受け入れている大学博物館が多い。たとえば、立正大学博物館は土・日・祝日の休館日でも、見学希望の場合は大学総務課が対応する。また、今回の調査でも、東京海洋大学水産資料館は閉館中であったが、開館し、案内を受けることが出来た。

このような一般公開日以外の見学の受け入れが大学博物館独自の特徴であり、そのために、公開日数が正確に開館日数をあらわすものではない。しかし、この点を考慮しても、見学者が来館しやすい土・日・祝日や学園休暇中を閉館する館が多く、全体として公開日数が一般博物館に比べ少ないのが現状である。

(2) 展示解説文

資料の理解を助ける展示解説文の添付は、施設によりまちまちであるが、全体に一般の博物館に比べ少ない。施設の中には早稲田大学坪内博士記念演劇博物館のように、積極的に解説文を掲示するところもあるが、多くの大学博物館は最低限の情報を提供するのみである⁽¹⁴⁾。この理由として、大学博物館が学生・教員の研究を重視し、研究者が資料に接し、その学術的意義を自ら探求する姿勢を尊重している点が考えられる。大学博物館にとって必要なのは「もの」であり、研究者はこの「もの」を求めて博物館を訪れるのである。

解説文の弊害については、近年一般の博物館でも議論がなされている。博物館・資料館の中には、展示資料よりもパネル解説が主体となる施設もあるが、そのような展示では、解説を読むだけで、資料を理解した気になる危険がある。しばしば美術館などで、絵を十分に鑑賞せずに解説だけを読んで帰っていく見学者の場合も同様である。その点、解説文を必要最小限にすることは、研究目的の強い大学博物館にとって、学生の自由な学習への発展を誘発する効用がある。

しかし、大学博物館には専門的な資料が多く、専門知識の無い一般の見学者にとっては、資料だけでその価値を理解することは困難である。今後、大学博物館がより社会教育機関として活動をするためには、一般の見学者への配慮が必要であり、適度な解説文の添付が欠かせない。大学博物館は、一般見学者の理解を助けながら、不必要な先入観を持たせない解説文のあり方を検討する必要があると考えられる。

(3) 企画展示

企画展示の有無、回数は解説文の問題と同様に施設の方針により異なるが、全体として大学博物館は一般の博物館に比べ、企画展示への関心が薄いといえる。この理由として、企画展示の目的の一つに見学者の再来館を促す点があるが、大学博物館はもともと無料公開の館が多く（展示学研究所の調査では回答館の85%が無料）、入館者数の向上にそれほど意欲がないことが考えられる。また、実物がいつで

もそこにあることが博物館にとって重要であることを考えると、常設展示の充実こそが博物館本来の姿であるということもできる。

しかし、西野が指摘するように、大学博物館の企画展示は、さまざまな問題を提起し、論議する教育の場となりうる可能性を持つ⁽¹⁵⁾。大学博物館がひとつの教室になり、あるテーマに基づいた学問追求の現場となりうるのである。大学博物館の企画展示は、大学の研究成果を多様な視点から社会に発信し、資料の価値をより体系的・多面的に提供できる利点がある。たとえば東京大学総合研究博物館は、他の博物館・大学の協力の下に企画展示を充実させている。今後、このような先行的な施設の例を参考に、大学博物館の展示活動も、学術情報を特定の学問領域における論議の場に提供する企画展示と、自由な学問体系へと発展させる契機とする常設展示との効果的な組み合わせを考慮する必要があると考えられる。

大学博物館の展示システムの事例

これまでの考察により、大学博物館の特性は学術標本の収集・保管・活用、特定分野を深く掘り下げた専門性、そして母体となる高等教育機関との連携にあると考えられる。この点を踏まえるならば、大学博物館にとって独自で有効な教育普及活動のあり方とは何であろうか。

(1) 展示システム

大学博物館の研究者、学芸員、一般の利用者などの意見を集約すれば、大学博物館における教育普及活動に関するいくつかの重要な指摘が挙げられる。

実物展示、 多数展示、 展示解説

これらの意見を統括すると、大学博物館の見学者が、学術資料から各自の興味を学問体系へと発展させる契機を最も適切に提供するものが望ましく、見学者がその資料をより具体的に把握し理解できるように、なるべくハンズ・オンを取り入れることが好ましい。また、見学者各自が見学後に興味を持つ分野の研究を進めるための文献調査も不可欠である。

以上の点を踏まえ、具体的な教育普及活動のあり方を導き出すために、まず博物館の教育普及活動をシステムとしての展示と、人的活動としての教育普及活動に分け、実物展示、多数展示、展示解説、ハンズ・オン、文献調査、講座の各項目を設定した。次にそれぞれの項目ごとに参考となる施設をおのこの1館取り上げ、調査研究することで、大学博物館の教育普及活動のあり方を考察した。

(2) 実物展示の事例

東京大学総合研究博物館

この博物館は、「The University Museum, The University of Tokyo」という名称が示す通り、ユニバーシティ・ミュージアム構想を契機に、以前の総合研究資料館を改組し、開設されたものである。当初の資料館は、もともと大学内共同利用施設として設置されたために研究室と一体であり、日曜・祝日は休館であったが、現在は学外公開施設として独立し、休館日を月曜（祝日の場合は火曜）に設定し、より学外利用に配慮したものになっている。

建物の1階・2階が博物館であり、1階が企画展、2階が常設展の展示室になっている。企画展示室は見学当日、「シーボルトの21世紀」というテーマにより、19世紀にシーボルトが収集したコレクションの展示を行っていた。それぞれの展示資料には300字程度の解説がつき、ビデオ上映もあり、見学者の理解を助ける配慮がなされていた。展示の数を少なくし、空間を贅沢に取り入れた展示方法は、一般の博物館と遜色の無いものである。安全のために警備員も配置されている。

2階の常設展示室は、一転して大学博物館としての特色がよく現れている。この常設展示は、自然科学系の鉱物学、植物学、生態学の範疇で、それらの学術資料が多数展示されており、研究室の独特な雰囲気醸し出している。階段を上るとすぐに球状花崗岩の展示、アカシカの全身骨格標本などが置かれ、中央の大きなガラスケースには様々な鉱物のコレクション（若林鉱物コレクションなど）が展示されている。また奥の壁沿いには、人間の頭蓋骨が数十点並べられ、わが国先人の古代から現代に至る骨格の変化や、世界各地における民族の頭蓋骨の特色を見

ることができる。これら2階の資料は、ほとんどが実物であり、ずらりと並んだ実物資料は迫力を持って見る者に訴えかける。また、1836年に発見された鉄隕石の実物は、ケースに丸い穴がつけられ、手を触れることが可能になっている。

大学博物館における実物展示

大学博物館の特性は、学術標本の活用であり、学術標本は、学問を構築する基礎となるものである。したがって、大学博物館の展示は見学者の関心を学問体系へと誘発するものが望ましい。そのためには、学術標本の実物資料としての価値に着眼すべきである。実物の持つ迫力は、見学者に強い影響を与える。それは実物資料こそが、悠久の歴史を検証するものであり、同時に一流の文化財のみが有する、他の追随を許さない崇高な威厳を人々に伝えるものだからである。

この実物に接することで、見学者はその文化財のもつ価値に興味を抱き、その関心は、次第に資料の文化的・社会的な背景にまで拡大する。このように実物に触れることは学問の原点であり、出発点である。したがって、大学博物館が学問の基礎を提供するためには、実物資料の展示が重要である。実物資料による学びの契機となる生成こそが、大学博物館の重要な教育活動の一つと考えられる。

もちろん、資料によっては健康状態や保全のために実物展示が困難な場合もあり、その際にはレプリカが利用される。しかし、たとえレプリカであっても、大きさや素材等、可能な限り正確に複製され、元の資料の持つ質感・量感を忠実に伝えることが可能である必要がある。

(3) 多数展示の事例

東京海洋大学水産資料館

(旧東京水産大学水産資料館)

この資料館は、1902（明治35）年に設立された農商務省水産講習所に端を発し、1959（昭和34）年に公開された、大学博物館の中でも最も歴史のある施設の一つである。2003（平成15）年10月1日、東京商船大学と東京水産大学が合併し、東京海洋大学が誕生したのに伴い、名称も東京海洋大学水産資料

館と改められた。現在の所蔵数は4万5千点を超えている。

この資料館の1階はセミクジラの実物の全身骨格標本が置かれ、学生が乗船する実習船の模型が展示されている。また、このホールは特別展や臨時展示にも使用される。2階には、ノリの養殖の過程を順に追うものや、鰹節の製作課程といった産業史学分野の展示とともに、ケース内には無数の貝類、水産生物のホルマリンづけ標本類、魚類や海鳥類の剥製がおびただしい量で並べられている。それらの中には生物学分類上で基準となる「タイプ標本」や、ガラパゴス諸島におけるウミイグアナの剥製のような世界的に貴重な資料も数多く展示されている。広い展示室には多くのガラスケースが並び、多数の展示資料が見学者に提供されている。

大学博物館における多数展示

あるテーマに基づき資料を選び、解説を加える展示方法は、見学者が理解し易い反面、特定の学問体系を見学者に強要する危険がある。しかし多数展示は、多くの資料を展示し見学者に提供するもので、短時間での理解が困難な反面、見学者の自由な鑑賞を可能にし、見学者に多様な選択肢を与えることができる。大学博物館の教育目的の基本は、見学者が実物資料から、各自の興味を学問体系へと発展させる契機を作る点にある。そのための展示システムは、見学者の自由な発想を誘発するものが必要である。したがって、大学博物館の展示はなるべく多くの資料を展示する多数展示が望ましい。

また、大学博物館の特性には特定の分野を深く掘り下げた専門性がある。大学博物館は、大学の歴史とともに生成された学術資料を大学の研究成果として蓄積している。このような豊富な資料を体系的に提供できるのは、大学博物館において他にはない。これらの資料を多数展示することは、学問体系の奥の深さを見学者に啓蒙する効用があると考えられる。

この多数展示のためには、建物という限られた空間の制約を考慮し、1点豪華主義的な展示を避け、必要以上のパネル解説を省いた、効率の良い展示が求められる。また、広い見学路の確保が困難になる場合も想定される。もちろん大学博物館も博物館で

ある以上、一般の博物館と同じように、見学者に心地よい空間を与える必要がある。たとえば、博物館疲労、お年寄りへの配慮といったことは当然考慮すべきであろう。また、見学者の安全を考慮することも忘れてはならない。その上で、なるべく多くの資料に接することが可能な、効率的な展示配置・順路の設定が検討されなければならない。

また、資料保管の面では、環境の良好な収蔵庫ではなく、展示室に多くの資料が常設されることから、その維持・管理にも特に注意を払う必要がある。連日多くの見学者が訪れる一般博物館とは異なり、大学博物館は比較的、展示室の環境を良好に維持できる。したがって、大学博物館は展示室を一つの収蔵庫と考え、展示しながら良好な状態で資料を保管することも可能である。しかし、そのためには展示室での空調設備や、定期点検、消毒といった作業を徹底することが欠かせない。

大学博物館の教育普及活動のあり方

(1) 展示解説の事例

武蔵野音楽大学楽器博物館

武蔵野音楽大学は、1953(昭和28)年より楽器資料の収集・保管を行い、1960(昭和35)年より楽器陳列室を開設し、1970(昭和45)年より楽器博物館として開館している。公開日は、江古田キャンパス楽器博物館が毎週水曜日、入間キャンパス楽器博物館が毎週火曜日である。しかし、原則としてこれらの公開日は自由見学であり、この博物館では大学の休日を除く職員の勤務時間内に随時、団体見学の受け入れを行い、展示解説を伴った見学ツアーを実施している。この博物館の教育活動はこのような団体見学が重要で、平成14年度の総見学者数5,620名のうち学外見学者数は3,545名で、全体の63%にあたるが、この学外見学者の53%にあたる1,907名が展示解説を伴った団体見学者であり、平成14年度の案内団体数は88件に上る。

楽器博物館では、施設規模の制約から、1団体の人数を最大40名3グループに制限し、各グループを1名の館員が資料の解説を加えながら誘導する。1回の案内は、1時間半程度のものが最も多い。案内

では、楽器の特性を考慮し、館員が音出しのできる楽器を選定し、自ら簡単な演奏・音出しを行いながら説明を加える。また資料によっては、実際に見学者が触れ、音を出すことを認める。団体見学は小学校・中学校・高等学校・専門学校・大学といった学校機関の授業見学が最も多く、ついで生涯学習の団体が多い。この団体見学案内は楽器の音が聞け、理解に役立つと好評である。

大学博物館における展示解説

展示解説は、過去の事象に関する資料と見学者の橋渡しをするものである。この方法は、見学者が資料を把握する上で効果大きいことから、近年多くの博物館が注目している。特に大学博物館の展示では、なるべく多くの資料を展示することが望ましいことから、パネルや解説文の占める割合が少なくなる可能性が高い。その点からも見学者の理解を助けるために、展示解説により資料の説明を行うことが効果的であると考えられる。

展示解説には、解説者が資料の前に立ち、順路に沿って訪れる不特定多数の見学者に資料の解説を行うものと、規定人数の団体見学を、解説者が案内役となって見学者を誘導するものがある。資料の前で不特定多数の見学者へ解説を行う場合は、見学者の要求を特定できない点で、多くの人々が共通して求める情報に落ち着く傾向がある。したがって、団体を誘導するスタイルがより見学者個々の求める情報を提供できると考えられる。最近のわが国の美術館でも、目的意識のはっきりした団体見学を展示解説の中心に置き、見学者の性格に応じた解説を工夫する傾向が見える⁽¹⁶⁾。

多くの博物館にとって、展示解説の問題点は、案内者の確保である。その解決策として、アメリカをはじめわが国でも、ボランティアが重要な要員である。しかし、アメリカのように解説員の事前教育が制度として徹底されている環境と異なり、わが国ではボランティア解説員の教育は個々の博物館に任されており、結果として解説員の知識・対応能力といった資質に強く左右されてしまう。解説員にはさまざまな見学者の質問に適切に対応できる能力が求められるが、現実問題として、博物館内の多くの資料を

広く深く理解することには困難が伴う。このようなボランティアに対する事前教育の問題は、わが国へのミュージアム・エドゥケーターへの導入と係り、今後の検討課題といえることができる。

(2) ハンズ・オンの事例

長野県立歴史館における常設展示

- 見て、触れて、体感する展示 -

1994年(平成6年)に開設された長野県立歴史館は、当初よりその常設展示を「見て、触れて、体感する展示」と題し、縄文時代の人々の生活を実感できる展示を行っている⁽¹⁷⁾。この展示は「信濃の風土が育んだ原始の生活」というテーマで、ヒノキ林(実物)、首を振るナウマン象、縄文の村の景観としての竪穴住居や高床建物、住居に暮らす家族、縄文人の使用した生活用具などがすべて実物大で復元され、展示されている。復元にあたっては、素材、製作方法などを当時のまま忠実に踏襲している。見学者は広い展示室を散策しながら、自由に展示品に触る(ハンズ・オン)ことができ、縄文人の使用した品を手にとってみるができる。

大学博物館におけるハンズ・オン

アメリカのチルドレンズ・ミュージアムに始まった博物館におけるハンズ・オン・システムは、その教育効果の高さから、瞬間に世界中の科学系博物館が採用した。その後、この方法は他の分野の博物館にも波及し、現在世界中の博物館でハンズ・オンの導入は一種の流行にもなっている。この展示方法として、一般的には展示室内にハンズ・オン・コーナーを設け、鎖などでつながれた資料を自由に触れるシステムが多い。当然ハンズ・オンの対象となる資料は破損に強く、レプリカのように再生可能なものが大多数である。

しかし、大学博物館は多くの実物資料をハンズ・オンの対象にすることが望ましい。たとえ貴重資料であっても、なるべく触れるような工夫が必要である。それは、実物資料のハンズ・オンこそが見学者の興味を引き出すために最も効果的な方法だからである⁽¹⁸⁾。資料をただ見るのではなく、それを手に持ち、その質感・量感を肌で感じることで、その資料

が自己と一体となり、そこから新たな興味が誕生するのである。

もちろん、決して触ることの出来ない貴重資料も存在する。また、触れられる状態の実物資料をすべて自由に触られては、資料保全の面からも問題がある。そのために大学博物館では、展示解説の中で手に触れられる資料を選定し、それを見学者に提供する方法が最も効率的と考えられる。展示解説中であれば、選定した資料が比較的貴重な資料であっても、解説者がハンズ・オンの度合いを判断しながら行うことが出来る。このように見学者の理解を助け、資料の意味を強く印象付けるために、大学博物館は展示解説に積極的にハンズ・オンを取り入れることが肝要である。

(3) 文献調査の事例

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

この博物館は、大学博物館の中でも著名な施設の一つであり、「えんぱく」の名で親しまれている。博物館には錦絵、舞台写真、衣裳、人形など演劇に関する資料が数十万点所蔵され、基本的に月曜から土曜まで無料で一般公開している。展示資料にはおのおの400字程度の解説が添付されている。また常設展と平行して年数回の企画展を行っており、このように一般の博物館と遜色ない活動を続けている。特にこの博物館の特徴は、館内と学内に図書室が設置され、学外の見学者が文献資料を閲覧・複写することが可能な点にある。

演劇博物館の図書室には、明治以降に出版された演劇・映画・民俗芸能・舞踏・音楽等に関する図書や雑誌、及び中国・韓国の演劇資料のほか、約1万冊の演劇台本、約1万2千冊の映画シナリオが所蔵されている。これらの図書資料は演劇博物館1階の和漢書室と、6号館3階の洋書・貴重書・韓国語図書室に分けられ、共に利用者は身分証を提示の上、閉架式システムによるカード請求で図書を受け取る。また、6号館3階にはOAブースも設置され、日本の古典芸能や各国の民俗芸能、演劇、映画など、演劇に関する多様な資料を視聴することができる。

大学博物館における文献調査

大学博物館の教育普及活動は、個人の興味を継続学習につなげるものが望ましい。その継続学習のためには、文献資料や関連資料の調査が欠かせない。本研究で明らかになった大学博物館の特性のひとつに「母体となる高等教育機関との連携」があるが、文献調査では、特に大学図書館の資料を見学者が利用できる環境が求められる。そのために大学図書館の学外開放が不可欠である。現在、多くの大学図書館が学外利用に制限があるが、この傾向は徐々に開放に進んでいる⁽¹⁹⁾。今後、高等教育機関が生涯学習へより開放されるためには、博物館と図書館が一体となって、学外に門戸を広げることが必要と考えられる。

大学博物館の文献調査では、図書室で得た知識を、再度博物館の資料で確認するなどの作業が求められる。したがって早稲田大学の例のように、見学者の利用可能な図書室が博物館内に設置されることが理想的である。たとえ別置の場合でも、なるべく連携が取れるように、地理的に隣接し、利用時間の共通性が必要である。

(4) 講座の事例

明治大学考古学博物館入門講座⁽²⁰⁾

明治大学考古学博物館の生涯学習活動は、「講座」が重要であり、そこを基点として図書館の利用や、ボランティア活動へとステップ・アップしていくことが可能になるよう仕組まれている。その中で入門講座は1995年11月に開講し、1講座10講義(各90分)で構成された。この講座で受講生を30人に絞ったのは、同大学博物館の公開講座の規模拡大が、博物館独自の学習を阻害し、講座がカルチャーセンター化したことへの反省からであった。同講座は、「見て・読んで・触れる」を博物館教育の理念と考え、その実践を試みた。そのために、1995年の入門講座の第8回「弥生人の食生活」の講義では、壺、鉢などを受講生の座る周りの机に並べ、また土器片を受講生全員に行き渡るように用意し、直接手で触れてもらった。その際にはあらかじめ直接触れる場合の注意事項を説明した。

大学博物館における講座

公開講座等の講座は、高等教育の行う生涯学習の代表的なものであり、決められたテーマに基づき、社会に高度な教育の場を提供するものである。大学博物館も高等教育の成果を地域に発信するために、積極的に講座形式の教育普及活動に参画しなければならない。このことは図書館の開放と同様、大学博物館の特性である「母体である高等教育機関との連携」に関わるものでもある。

しかし、公開講座の規模が数百人に達する場合には、必然的に講師による講義が主流になり、博物館教育の基本である「もの」資料に基づく学習の実践は不可能である。したがって大学博物館の講座は、なるべく少人数が望ましく、明治大学の事例のように、20～30人が理想であると思われる。また、なるべく実物資料に触れる形式が好ましい。参加人数を少数に絞ることで、参加者は実物資料を身近に、専門学芸員の解説を聞き、資料によっては手で触れることができ、学習効果の高い講座を受講することが可能である。

おわりに

これまでの考察により明らかになった本研究の課題を整理する。第一の、「大学博物館の機能を考察し、その特性を明確にする」という課題については、博物館は、「資料の収集」、「資料の整理保管」、「調査研究」、「教育普及活動」の4つの機能を有する。さらに大学博物館は、独自の機能として、「学術標本の収集機能」、「学術研究機能」、「研究成果の教育普及機能」、「学芸員養成機能」、「大学宣伝機能」を有する。これらの機能から導き出される大学博物館の特性は、学術標本の収集・保管・活用、特定の分野を深く掘り下げた専門性、母体となる高等教育機関との連携の3点にある。

第二の、「大学博物館の教育普及活動の現状から、その問題点を明らかにする」という課題については、大学博物館の教育普及活動の現状には、学内利用の優先とともにその研究偏重的体質から引き起こされる閉鎖性から、学外への開放に消極性が見られ、開館日数が少ないだけでなく、展示解説文の不足、企画展示の少なさなどの問題点が挙げられる。

第三の、「課題1で明らかになった特性を考慮し、大学博物館の独自で有効な教育普及活動のあり方を検討する」という課題については、大学博物館の教育普及活動は、見学者が学術資料から各自の興味を学問体系へと発展させる契機を最も適切に提供するものが望ましい。具体的には実物展示と多数展示を展示システムの基本とし、見学者が資料を適切に理解できるように展示解説を積極的に取り入れる。また、その際には資料をより具体的に把握できるようにハンズ・オンを取り入れることが好ましい。また、見学者各自が見学後に興味を持つ分野の研究を進めるための文献調査も不可欠である。

今後、このような活動の実現のために新たに想定される問題として、以下の3点が挙げられる。

第一には、「展示解説のための博物館解説員の制度的確立や指導カリキュラムの整備」という問題である。本研究では団体見学への展示解説が「見学者の興味を引き出し、大学博物館の資料を学問体系へ移行させる効果的な手段である」と提案した。そして、展示解説のためには知識の豊富な解説員の確保が必要であり、退職教員など大学の人材を多角的に活用し、アメリカのミュージアム・エデュケーターに見られるように博物館解説員の制度的確立や指導カリキュラムの整備が不可欠である。

第二には、「大学博物館同士の連絡・交流」という問題である。大学博物館は特定の分野を対象としたものであるが、見学者の知識の深化と拡張のためには、他の分野の博物館との連携が欠かせない。すなわち、大学博物館同士の連絡、交流が不可欠である。現在、大学博物館を網羅するリストすら存在していない。今後、全国規模の大学博物館同士の研究会・連絡会を設立し、常に新しい大学博物館のリストを作成し、博物館同士の交流の場を提供することが必要と考えられる。

第三には、「経済的支援」という問題である。積極的な教育普及活動の実現のためには十分な経済的支援が必要である。現在の日本私立学校新興・共済事業団助成金、文科省学術国際局研究機関補助金に加え、社会教育機関としての新たな国家・自治体による助成の拡大や、民間団体の援助が望まれる。

今日、人口の少子化にともない再編の嵐の吹き荒

れるわが国の大学は、その将来を模索している。おりしも 2004 年度からはすべての国立大学は独立法人化され、その活動が大学に委ねられる代わりに、国立大学も生き残りをかけた激しい競争に突入した。国立大学のみならず、全ての大学が、その教育の成果を積極的に社会にアピールすることが必要な時代が訪れている。大学は、もはや象牙の塔に収まるのではなく、積極的に社会と連携する必要がある。

わが国に先駆け 80 年代に少子化の波を受けたアメリカの大学は、いち早くマーケティングを行い、社会のニーズを把握した。その結果、継続教育、成人教育を拡大し、社会と一体となった現在のアメリカにおける大学の姿が確立した⁽²¹⁾。「ユニバーシティ・ミュージアム構想」は、社会と大学が密接に関係する、まさにこのような欧米型の大学と大学博物館のあり方を提案するものと考えられる。

大学博物館は、大学と社会の接点として、高度な社会教育の場を提供できる可能性を持つ。大学は今、大学博物館を情報の発信地として積極的に社会に提供し、地域と共存した欧米型の高等教育機関へと飛躍することが求められている。それがこれからの大学の歩むべき道なのではないだろうか。

[注]

- (1) 学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』(報告)1996年 - 1「ユニバーシティ・ミュージアムの必要性」
- (2) (株)展示学研究所によれば、当時、わが国には非公開のものも含めて約 250 の大学博物館・資料館相当施設が確認されている。(展示学研究所編『日本の大学博物館』(トータルメディア開発研究所発行 2001年 はじめに)
- (3) 学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』1996年 - 1「ユニバーシティ・ミュージアムの必要性」
- (4) このことは、すでに1987(昭和62)年の第3回臨時教育審議会での答申、さらに1996(平成8)年の生涯学習審議会での答申でも明らかである。
- (5) 黒沢 浩 「大学博物館における教育活動」『明治大学博物館研究報告』第2号 明治大学博物館事務室 1997年 p.4
- (6) 高橋有美 「大学博物館に関する序論的検討」『生涯学習・社会教育学研究』第26号 東京大学大学院教育学研究科 2001年 pp.52~54
- (7) 西野嘉章 『大学博物館 理念と実践と将来と』東京大学出版会 1996年 「はじめに」 pp.i~ii・p.13 西野によれば、大学博物館と一般博物館の違いは、その収集対象が、学術的な裏づけを伴って体系的に収集された学術資料である点にある。しかし、一般の博物館が学術的な裏づけのない資料を扱っているわけではなく、その違いは設置者の違いであるという指摘もある(中村浩「大学博物館について」『全国大学博物館学講座協議会研究紀要』第6号 全国大学博物館学協議会 2000年 p.16)。
- (8) 熊野正也 「大学博物館のあるべき姿への一試論」『明治大学学芸員養成課程紀要』明治大学学芸員養成課程 1991年 p.21 また、角田によれば、1989年の時点で、全国の約130の大学が博物館学講座を開設しているが、この中で約100大学は付属博物館を持たないまま実習を行っている(角田芳昭 「大学附属博物館の現状と課題」『全国大学博物館学講座協議会研究紀要』創刊号 1989年 p.79)。
- (9) 黒沢 浩 「大学博物館における教育活動」『明治大学博物館研究報告』第2号 明治大学博物館事務室 1997年 pp.4~5
- (10) 熊野正也 「大学博物館のあるべき姿への一試論」『明治大学学芸員養成課程紀要』明治大学学芸員養成課程 1991年 p.9
- (11) 岡田茂弘 「ユニバーシティ・ミュージアムの必要性和構想」『東京家政学院生活文化博物館年報』3・4 合併号 東京家政学院生活文化博物館 1996年 p.32
- (12) 前掲(株)展示学研究所編『日本の大学博物館』トータルメディア開発研究所発行 東京 2001年 はじめに
- (13) 日本博物館協会「博物館の開館日数・時間・

- 入館料について」『博物館研究』第29巻 日本博物館協会 東京 1994年 p.24~28
- (14) 解説文の少なさについては、渡辺・駒身が指摘している。「資料は細かく分類され、専門用語によるキャプションと若干の解説によって構成された展示がパターン化していた」(渡辺良次郎・駒見和夫 「大学博物館の役割と整備」『東京家政学院生活文化博物館年報』3・4合併号 東京家政学院生活文化博物館 1996年 p.51)
- (15) 「大学博物館の『特別展示』のように、研究者と来館者がともに学術標本(モノ)を出発点として様々な切り口から問題について接近し、議論を闘わせることのできるような学術環境において他にないのではないか」(西野嘉章 『大学博物館 理念と実践と将来と』東京大学出版会 1996年 p.44)
- (16) 吉岡は、美術館に訪れる見学者を、美術に無関心な層、多少関心のある層、特定の分野に詳しい層、広く詳しい層の4つに分け、その対象に沿った展示解説が必要だと述べている(吉岡庸次ほか講演「美術館における展示解説について」『博物館研究』第29巻 日本博物館協会 1994年 pp.4~9・pp.11~16)。
- (17) 宮下健司 「見て、触れて、体感する展示を考える」『明治大学学芸員養成課程紀要』第8号明治大学学芸員養成課程 東京 1996年 pp.31~44
- (18) 熊野は、「諸学問のことは始めは、実物資料に直接手で触れることから開始する事がもっとも肝要である。なぜならば、実物に勝る資料がないからである。」と述べている。さらに、資料が触られることで、磨り減ってしまう心配に対し、「活用されるほうが、埃を被り、そのまま永久的に死蔵されるよりは余程ましである」とまで述べている(熊野正也著「大学博物館の社会的な係りとその接点」『明治大学博物館研究報告』第1号 明治大学博物館事務室 1996年 pp.11~13)。
- (19) 1998年の調査では、全国の国立大学の68.8%、公立大学の70.9%、私立大学の45.5%、全体の53.6%が大学図書館を学外に開放しており、この傾向は拡大している。しかし、利用に際して、利用登録制度がある館は280館、資料の貸し出しを行っている館は211館にすぎず、半数以上の館は1回の利用ごとに身分証を提示し、利用の許可を取る必要があり、また館内閲覧か複写にとどまる館が多い(戸田あきら「地域解放を前提とした大学図書館」『生涯学習空間』18号(株)ポイックス 1999年 pp.32~33)。
- (20) 黒沢浩 「大学博物館における教育活動」『明治大学博物館研究報告』第2号 明治大学博物館事務室 東京 1997年 p.8)。
- (21) 日本私立大学協会編 『米国の大学経営戦略 マーケティング手法に学ぶ』学報文化センター出版部 1998年 p.45~4

(Received: September 30, 2004)

(Issued in internet Edition: October 31, 2004)